
V I P達の福音書

深夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VIP達の福音書

【Nコード】

N6557D

【作者名】

深夜

【あらすじ】

『銀行員の恋』外伝。田原聡が会おうVIP達との想像を絶する世界。短編から連載に変更しました。作者は怪しいが、読者はもっと怪しい。。。

第1節 犬井夫人伝

第1節 犬井夫人伝

当行でも5本の指に入る純預金先の犬井氏。

その妻である和子さん（仮名）65歳の趣味はサイクリングだ。

『銀行と自宅の往復』という恐怖の物語・・・（おいおい）

自転車の名前は【ろってんまいやー号】紺色のママちゃり。

その他に、恥ずかしくなるくらい真っ赤なフェラーリ仕様の

【あーではいど号】も所有しているが、常には前車を愛用している。

そして、犬井夫人には相棒がいる。

バグ犬の『ちびすけ』年齢不詳。

以前、自転車のカゴから鞆をひったくられた経験があり、

番犬として犬を相棒にしているらしい。

鞆は番犬『ちびすけ』と繋がっているが、

クサリを飼い主が持っているわけではない。

つまり、ストラップなのだ。（謎）

外出は銀行への来店のみと噂のあるVIP犬井夫人。

買い物はお手伝いさんがやってくれるらしいのだが、

お金のことに關しては、すべて自ら行動するんだ。

今日も愛車【ろってんまいやー号】にまたがり当支店にご来店。

・
ここからVIPの威厳をまざまざと見せ付けられる事になる……

まず、正面玄関に自転車横付け。

支店には、自転車駐輪場があるんだ。

大抵の人はそこに自転車やバイクを駐車するんだけど……

犬井夫人も、自転車は駐輪場に止めるのだけれども、

その前に、用事を済ませるんだ。

窓口カウンターにバッグと鞆を置いて、その後、自転車を駐輪場に移動させる。

最初にこれを見たときの衝撃は、一生忘れないだろう。

そしてひとり（一匹）残されたパグ。

いつもテラーの女の子を見て『にやつ』と笑う。

『ぶふふうううう

ぶふふうううう

』

ペットは飼い主に似るというけれども、

犬井夫人とパグ犬『ちびすけ』は凄く似ている！

両方から見つめられると双子と見間違えそうになる（おいおい・・・）

この人にまつわる数々の伝説が今明かされる。

犬井夫人は毎日銀行にやってきました。

宵越しの現金は持ち歩かない主義（謎）という犬井夫人。

毎日の日課であるご来店は決まって現金の払い出しだ。
サイクリング

その来店時間は、きまって午前10時なんだ。

銀行ではもっとも忙しい時間帯なんだけれども、

来店時刻は目覚まし時計よりも正確なのだとか・・・

【ある月末】

通常よりも多い来客で、窓口が込み合っているが、

そんな事は犬井夫人には関係が無い。

いつもの如くパグを窓口に置いて一人去っていくんだ。

忙しい女の子は、

『おいくら払い出したしますか?』

事務的にお伺い。

『わん!』

窓口にはパグしかない……

『1万円ですね……』

……用事は済んだ。

【怪我をしたパグ】

ある日の来店時、パグは怪我をしていたんだ。

なんでも骨折したらしい。

普通の犬ならばかわいそうにも思えるのだけでも、

常に鞆のストラップにされている事を考えれば、

左足の包帯は、アクセサリーにしか見えてこなくなる（ごめんね・
・）

いつもの如くカウンターに置き去りにされるパグ犬『ちびすけ』

よほど痛かったのか、叫び声をあげるんだ・・・・

『きゃい

ん！！！！』

『改印かいいんですか？』

女の子は真面目に答えたのだという・・・・

【印鑑変更】

今日はなにやら怪しげなチラシをもって犬井夫人ご来店。

パグもあいかわらず元気な様子だ。

パグの表情を見れば、犬井夫人の機嫌もわかる。

アメダスレーダーより正確なのだから・・・・

怪しげなチラシの正体は、

よく新聞の折込なんかで見かける、金運上昇をうたった印鑑のもの
だった。

聞けば、今日届いたとの事で、早速改印手続きしたいとの申し出。

・・・・・・・・・・はじめて見た。

この手の広告からこういうの買った人。

たぶん、この人の家にある壺とか財布なんかは、

全てこんな感じのものなんだろうな（汗）

でも、お金は確かに持っていらっしやるのだから、

効果はあるのかもしれない（おいおい・・・）

『では、こちらに押印ください』

受付窓口の女の子は、マニュアルどおりの素晴らしい対応。

しかし・・・・・・・・印鑑を押すところに、勢いあまって【肉球】押印。

『きゃん！』

・・・・・・・・・・ちゃんと拭いてあげろよ。

【支店開設30周年】

当店は支店開設30周年を迎える記念の年であった。

創立記念の来店感謝デーを企画する事になり、

ギャラリースペースに開店時の写真を拡大し展示することになった

んだ。

最近のデジタル技術はすばらしく、ネガが無くても、簡単に古い写真から引き伸ばせるんだ。

その中の一枚から、若かりし頃の犬井夫人を発見したんだ。

さすが、30代。今では面影すらないが（失礼）

当時であれば、ちょっと街で振り向かれるほどの美人だったんだな・
・・

イメージの違いに驚愕したんだけど・・・

原版ではわからなかった写真だったが、拡大してさらに驚く事になる。

『パグもいたあ！！！！！！』

【眼力】

今日も【ろってんまいやー号】は快調だ。

カウンターにパグを置いて立去っていく犬井夫人。

その日は、本社から窓口事務指導で、ベテランの女性指導員が来店していたんだ。

なんでも、頭取の血縁関係にあるとの噂で、

うちの銀行では彼女に楯突く人などいないのだ。

カウンターに犬を置く。それをみちやった指導員。

『犬を置いていかないでください!!!』

大きな声で注意しちゃった……

そして、犬井夫人の目が光るんだ。

……次の週、指導員は関連会社に飛ばされた。

これがスーパーVIPの眼力か！

明日は我が身と震えだす。

第1節 犬井夫人伝（後書き）

この物語はフィクションです。

第2節 住職伝

第2説 住職伝

真 宗 山派 愛染山高福院。

僕の取引先に、御年80歳を越えているけど、いたって元気なご住職がいるんだ。

先輩銀行員から、ご住職の担当を引き継いだとき、

『話し好きで時間かかるから、忙しい日は注意しろ!』

なんて申し送りを受けたのだけれども・・・

幼少期に夏休みというと、真言宗の親戚のお寺に修行に出されていた僕は、

ご住職の説教なんてものは決して嫌いではない。

だから僕が担当してから、取引は急速に拡大して、

当店でも屈指のVIPとなったんだ。

『ウチの財産管理は田原さんに全部任せるよ!』

銀行員として、お世辞でも嬉しいのは「信頼」の二文字なのだ。

ある日、ご住職から訪問依頼の電話が入る。

なんでも火急の用件なのとか……

忙しい日ではなかったけれども、別件の用事があった為、

1時間ほど経過した後訪問することになったんだ。

『ごめんください』

予定時刻を少し過ぎただろうか。

急いでいるお客を待たせるのは、いつもながら気が引ける。

待たせる時間と、待つ時間では明らかに感じる時間のスピードが違うのだから。

庫裏の玄関から、奥の部屋で何人かの檀家の人達と、

話し合いをしている住職の姿が見えた。

なにやらガラス越しに見えるお客さんの顔は皆真剣そのものなんだ。

場の空気を読み間違えると大変だという事は、

銀行員になって嫌というほど味わっている。

この話し合いの為に、僕のことを待っていたのだろうか……

それとも、僕にまったく関係ないのであれば、

話し合いに水を刺す事になるな……

でも電話で訪問依頼されたのだから、挨拶もしないで帰る訳にも行かないんだ。

『ごめんください!!』

こんどは大きな声で叫んでみた。

部屋にいた全員が僕のことを振り返る。

するとご住職。

『あ……！大切なお客様だから……』

しまった……場を読み違えたかなあ。。。

大切なお客が居るって事は、時間をずらすくらいの気配りが必要だったのかも。

僕もまだまだな……なんて瞬時に後悔したんだ。

『大事なお客様だから、みんな帰ってくれ!』

すると、一斉に席を立ち始めるお客達。

あれ？

『帰れ』って、僕じゃなくてお客さんにだったの????

僕は入れ替わるように、先程までお客がいた部屋に通される。

するとなにやら、ご住職は慌てて片付けをしているのだ。

『いやいや、お忙しい所申し訳ない……』

お客を帰すほどの用件なのだ。

事は急を要する事なのだろう。

ん？なにか落ちたぞ……

半紙に見慣れない文字でなにか書いてある。

これは……サンスクリット語？

かつ、戒名じゃないか！！！！

ということは、今のお客って。。。。

『急に葬儀が入る事になってな……』

……住職。

葬儀よりも急ぎの用事って……（汗）

『実は……金庫が開かなくなつての……』

『金庫……ですか？』

聞けば、かつてウチの銀行から貰った（買った？）金庫がお寺にはあるのだと言う。

その金庫は、最近まで何事も無く使用していたけれども、

突然に開ける事が出来なくなったとの事。

『金庫の故障』だけならば、まったく銀行とは分野の違う相談だ。

けれども、取得したのが銀行の名前が出た以上、放って置くことは出来ないんだ。

金庫のダイヤル番号メモはあるようなので、

本当に故障か否か確かめる事にしたんだ。

『でかつ！！！』

金庫は予想以上にでかかったんだ。

これは昔銀行で使用していた金庫に違いない……………

本尊地下の秘密の部屋（僕も知らなかった）にその金庫は鎮座していた。

なるほど、ここなら泥棒でも躊躇することだろう（汗）

家庭用の大きさではないプロ用の金庫。

これと同様なものを、他のVIP宅で見た事があった。

銀行払い下げのものだと聞いた記憶がある。

ダイヤルメモ通りに動かしてみるが、まったく金庫は反応しない。

『これじゃ、僕の手におえないな……』

銀行の金庫を管理している業者宛連絡する事にしたんだ。

そして事が事だけに、上司に相談して銀行員2名立会いの元、

業者とあらためて訪問する了解を得て、その日は立ち去る事にした。

……ご住職、檀家の人待ってるから、早く戒名考えてね（汗）

そして、翌日……

業者の人がやってきた。

『どこのメーカーの金庫ですか？』

『……わかりません。間違いなく戦前のもんです。』

『……』

ひきつる業者を尻目に、ご住職の金庫に再挑戦だ。

昨日のダイヤルメモを渡して調べてもらう。

『・・・・・・・・この番号は間違ってますね』

『えっ、壊れているんじゃないんですか？』

『見る限り正常に作動しているようです・・・・』

意外な答えだった。

じゃあ、このダイヤルメモってなんなのだろう。

『ご住職、ダイヤルメモ違ってみたいですけど・・・・』

『んん？じゃ、あつちの金庫だったかな・・・・』

・・・・・・・・まだ僕の知らない隠し財産があるのか（汗）

結局、問題の金庫のダイヤルナンバーは不明のままだった。

メーカーも、こう古くては検索できないらしい。

すると、ここで金庫のプロの技を見せ付けられる。

『4桁のダイヤルであれば、最初の番号を特定できます・・・・』

『本当ですか？』

詳細は犯罪に悪用される恐れがある為、書く事が出来ない。

しかし、単純であるけど目からウロコのテクニクにより、

数字の1桁目が判明したんだ。

『住職、この続き覚えてませんか？』

『・・・・・・・・・・わからん！』

・・・・・・・・・・威張るな。

『じゃあ、お任せください・・・・・・・・・・』

またまたプロの技が炸裂する。

古い4桁のダイヤル式金庫は、

ある特定のパターンしか数字の組合せが出来ないらしい。

この金庫の最初の番号から推定するに、

36通りのパターンがパソコンから予想された。

『これを全通り試みて見ます。これで開かない場合は金庫を破壊します・・・・・・・・・・』

『おお、破壊僧と呼ばれているぞ』

・・・・・・・・・・それは当たっているだろうな。

『カチャ！』

1回目の番号を試してみると、金庫は何事も無かったかのように開

いたんだ。

『こつ、これはあああああああ！！！！！！！』

その場に居合わせた住職以外の全員が驚愕したんだ。

まず、中から出てきたものは……

『金庫のダイヤルメモ』

これじゃ、いくら探しても無いだろうなあ。

……そして、

【大束8つ】

つまり、現金8千万。

『じゅ、住職ううううううう！！！！！！！！』

これは、個人がもっていていい金額ではないのだと延々説教する。

まったく、どちらか住職なのだか……

金利がいくら低いとは言え、銀行の預金は安心なのだ（防犯上ね・
・）

大束（1千万）を金庫といえど無造作に置いて置くのは無用心極まりない。

インフレになったらどうするつもりだったのだろう。

銀行の通帳に入金しなさいと諭されたご住職。

現金で手持ちにするリスク。

目の前に積まれた大束を前に、ようやく安堵の表情を浮かべ、

快く通帳入金に応じる事になったんだ。

帰り際、ご住職が僕に一言お礼をしたんだ。

『田原さん、ご親切にありがとうございます。生き返ったようだよ……』

『半分棺桶に足突っ込んでるくせに……』

騒ぎを聞きつけやってきた奥さんにも現金の事がばれてしまった。

この後のご住職の身の安全が不安でもあったんだけど……

奥さんに聞こえないように、僕に耳打ちして見せるご住職。

『やつぱり、現金じゃなくて、インゴット（金の延棒）のほうが良かったのかな？』

宗教法人は非課税である。

坊主丸儲けとは良く言ったものだ……

第2節 住職伝（後書き）

この物語はフィクションです。

第3節 毒饅頭伝

菓匠千寿庵。

老舗の菓子店舗にはVIPが多い。

戦後、甘いものに餓えていた時代。

いかに闇物資を確保できたかが、『老舗』を繁栄できたかという歴史であるのだと、

先代千寿庵当主である橘宗右衛門氏（82歳）は語る。

千寿庵名物が、皮と餡に味噌を練り込んだ『味噌饅頭』。

1日3千個は売れるといわれているこの饅頭のおかげで、

千寿庵は、県下に10店舗の支店を開設し不動の地位を獲得している。

そんなご隠居は、5年前からネット株式を始める等、

チャレンジ意欲と資産運用は旺盛。

千寿庵の社員からは『饅頭じいちゃん』の愛称で呼ばれているんだけど……

銀行員にとっては、【毒饅頭】と称されるほど恐ろしいVIPなのだ。

『おはようございます』

朝一番で訪問して欲しいとの電話依頼があり、さっそく僕は伺うんだけど……

『遅い！』

開口一番遅いと言われるのでは、今日の訪問も思いやられるだろう。僕がご隠居にお邪魔したのは、電話から5分も経っていない時刻なのだから……

『この橘宗右衛門、一度たりともお客を待たせた事は無いぞ！』

これは、怒られたのではない。

お約束の【今日の挨拶】である事を、僕はようやく理解することが出来た。

この後のフレーズは、一度や二度聞いたことのある、

『橘宗右衛門波乱万丈の歴史』である事は間違いないのだ。

休憩中は時間の進行が早いのに、仕事中は時間が遅く感じる……

それが極端になっているのが【毒饅頭】ワールドなのだ。

それだけ、僕の訪問を心待ちにしていたとの証明なのだ。

こんな事くらいで怒っているのでは付き合いきれない。

それ以上に、支店の収益ではトップに君臨するほどのVIPである。

多少の事は許されるべき『お客様』なのだから……

『今日は、ちょっと頼みがあつてな……』

………少なくとも、人に物を頼む態度ではない。

『これを見せてくれ……』

『なんでしょうか？』

テーブルの上に、スーパーのロゴが入ったビニール袋が置かれている。

だいぶ膨らんでいるから、中に何か入っている様だけれども……

2重になって縛られている袋を開けてみると。

『……………!!』

『………つつ………』

『………つつ………小判ですか？』

『ああ。これで100両。』

………江戸時代じゃないんだからさあ……

『これ、いったい現在のお金でいくらするんですか？』

『・・・・・・・・知らん。』

だいたいそれは田原くんの専門分野じゃないのかい？』

『銀行で、小判は取り扱ってませんよ・・・・・・・・』（汗）

銀行で金貨は扱えるんだ。

『円』以上の貨幣なら換金する事は出来る。

けれども、金貨の額面以上の価値があるのだから、
銀行で額面両替しようとする人なんて絶対いない。

10万円硬貨が偽造された時代があつたけど、

それは当時の金価格が低かつたからなんだ。

現在では、金の価格は上昇していて、

それに伴い10万円硬貨の価値も上昇している。

だから、本物の金を使って偽造するなんて事はないのだ。

偽造が出回った時、大量の10万円硬貨が銀行に戻って来たのだけれども、

『あの時両替しなければ……』

と悔しがる人は、これから也确实にふえるだろうな。

『……これは享保小判ですね』

『さすが、知っておるな』

時代が享保以後、金の含有量が極端に悪くなる。

だから、享保以前の小判は価格が高いつてことだけは、

銀行員の雑学で知っていたけど……

『1枚20万の捨て値で考えても2000万ですか？』

『骨董的価値から言うと、1枚30万はするじやろ……』

……ご隠居、やっぱり価値知ってんじゃん。

僕を試したことに気がついた。

これだから、VIPは気が抜けない。

ボケた振りをして、相手を観察しているなんて事は良くある話なのだ。

『つまり、菓子金庫……じゃなかった、貸し金庫にお預かりって事ですね。』

『さすが、飲み込みが早いの・・・』

それを商売としてやってますから。

でも、これって今までどこに保管していたんだろうな？

『ご隠居、これなんでビニール袋に入れてるんですか？』

『ああ、濡れない為じゃ。』

『濡れないって・・・』

『庭の木の下に埋めておったからのお。』

・・・『徳川埋蔵金』ここにありました。

『しかし、もう100両隠しておると思ってたんじゃが、見つからなくてのお。。。』

(.!)!!

饅頭じいちゃん埋蔵金伝説。

菓匠千寿庵、トレジャーハンター急募。

第3節 毒饅頭伝（後書き）

この物語はフィクションです。

第4節 御側用人伝

骨董好きで有名な大口預金先の加納さん。

当店でも屈指の預金高を誇るVIPである。

なんでも先祖は徳川家に使えた御用人、加納主税の血筋なのだろう。

担当者であれば、一度や二度耳にする事になるのだ。

もつとも、徳川家の歴史にその様な人物は登場しないのだが・・・

その事を指摘してしまうと、

『我がご先祖は、【隠密】お庭番の出である！』

と、先祖伝来の刀、【栗田口国綱二尺二寸余】を振りかざしながら向かってくると、

前担当の先輩から引継ぎされた。

『命が惜しかったら、否定するな・・・』

いまでもこのセリフは耳に残っている。（恐ろしい）

ある日の訪問時、僕はいつものように座敷に通された。

でも、その日はいつもと違っている事があつたんだ。

加納さんが、なにやら真面目な顔をして何かを手に行っている。

・・・ん？

しっしっしっ・・・真剣？

鈍い光を放つその物体は、紛れも泣く日本刀！！！！

まさか、僕を刀の錆にするつもりじゃ・・・

・・・そういえば、先月契約した投資信託は元本割れてたな。（汗）

『ちょっと待っててくれるかい？』

ゆっくりとした口調で答える加納さん。

どうやら、ご立腹して刀を取り出したわけじゃなさそうだった。

いきなり切りつけられる可能性は回避された。（おいおい）

なんでも、近々地元博物館の刀を展示するイベントに、

愛蔵の刀を数本出展するらしい。

僕がお邪魔したタイミングは、その為の準備中だった訳で、

テーブルに刀が10本程並べてあつたんだ。

『栗田口国綱ですね・・・』

VIPは骨董好きの人が多い。

銀行員は広く浅くの多方面の知識を持つものが、セールス勝者と成り得る。

僕は骨董・美術品関係もある程度の知識をセールスの手段として心得てある。

趣味の話題。これほど確実な切り口はないのだ。

『！？』

『あれ・・・栗田口じゃなかったですか？』

『田原くん、刀に詳しいのか？』

『いえ、知識としては全くなのですが、池波正太郎が好きなので・・・』

栗田口国綱は、鬼平犯科帳の長谷川平蔵が所有していたことで有名である。

学生時代、池波文学が好きで読みあさった事があり、名前だけは覚えていたんだ。

そして、その刀が加納家に所蔵されている事は先輩からの引継書に記載されている。

重要刀剣に指定されているのくらいの家宝なのだから、

数ある刀の中で、一番丁寧に扱われている物が栗田口国綱だって事は予想できた。

決して刀の刀紋を一目見て判断した訳じゃなかったんだけど、

加納さんは僕がそんな単純な理由で刀を見極めたのでは無いと思っ
たらしく・・・

『じゃ、これを見てくれ！』

出てくる出てくる・・・

ここは日本刀の製造工場か！ってくらいの刀が蔵の中から御登場。

加納さん、むかし五条大橋で刀狩とかしてたことありませんか？

僕の刀の知識なんて、銘を見れば少し時代がわかる程度しか持ち合わせていない。

実物を見て勉強したのではなく、VIP用の小手先の知識として、

本を読むことでしか習得していないのだから。

まずい、馬脚を現したら切って捨てられるかも・・・

加納さんは既に刀の世界に逝ってしまったようだ（失礼）

まさに妖刀の魔力ってヤツだな・・・

これ以上ディープな世界に連れて行かれる前に、なんとか切り返さなくては！

『すばらしいご趣味ですね、加納さん。』

『そうだろう、刀は持ち主を選ぶというからな』

・・・すごい自慢だ。

『あともうひとつ私には趣味があつてね。』

『骨董は全般的に収集されておられると聞いておりますが・・・』

『骨董じゃなくて食べるほうなんだよ。』

自慢の頂点を迎えた為か、なんとか話題の方向をすえる事が出来た。

食べる方ならば、骨董より僕の得意の分野なんだ。

ほっと一安心するんだけど・・・

『どうかな？田原くん。もうすぐお昼だから、私の腕前披露するけど』

『食べるほうじゃなくて作るほうなんですか？それは楽しみです。』

今日は時間が融通効く日でよかったあ。

なにが出て来るのかと、日本刀だらけになったその部屋で待つ事9

0分。

『おまたせしたねえ。』

『ええ、本当に待ちました！』 言えない。

なんと、大量の手打ち蕎麦が出てきたんだ。

10人分くらいあるだろうか・・・

『全部食べていいから、ささっ遠慮しないで・・・』

・・・これを僕一人で全部食べろってか。。。。

完食しないと預金が逃げるかもしれない恐怖と戦いながら、

1時間かかってたいらげる。

・・・しばらく蕎麦は見たくないな。

『いやあ、ごちそうになりました。とても美味しかったです！』

・・・それしかコメント仕様が無い。

『いつから蕎麦打ち始められたのですか？』

僕は最後の気力を振り絞り、セールストークに徹する。

『先祖伝来だからな』

『・・・はっ？』

意味がわかりません。

『側（蕎麦）用人の家系であるからの・・・』

思わず後に倒れ込む・・・

第4節 御側用人伝（後書き）

この物語はフィクションです。

第5節 【Bar A waist curves】伝

当地でも有数の資産家と言われている小村三十郎氏（72歳）

当行との取引はほとんど無かった為、

僕は取引拡大を目指してセールス訪問するようになった。

資産家と呼ばれるお宅には、当行だけではなく数多くの金融機関が出入りする。

当然金融機関同士の競合がある訳で・・・その中に入り込むのは簡単ではない。

そんなVIP攻略の鍵は、奥さんにある場合が多い。

どんな家庭であつても、財布の紐は妻が握っている事が多いからだ。

小村さんを良く知る取引先社長から、奥さんの趣味はクラシックだと聞いた僕は、

訪問時のセールストークの組立てを、この線から当たろうと決めていた。

そしてある日、小村家にセールスの為、訪問してみたんだけど・・・

『おつ、誰かと思えば田原君じゃないか・・・』

先客がいた。

あんしん銀行取引先の、某社長がお帰りする所だった。

『小村さんと取引あるんだ』

『これからお取引頂戴したいとお願いにきたんです・・・』

それじゃという事で、取引先社長から小村さんに僕の事を紹介頂いた。

『紹介』があると無いのでは、締結の確率はまったく違ってくる。

思いがけない助力を得た僕は、ほとんど労することなく取引獲得することができた。

『社長、先日は小村様にご紹介いただきまして、ありがとうございます』

次の日、早速紹介してもらった社長宛お礼に伺う。

頂戴するだけではなく、こういったお礼をすることが、次のセールスに繋がるんだ。

『いやいや、私はなにもしてないんだけど・・・』

『・・・けど？』

『かえって田原君が苦勞するんじゃないかなかったかって、あれから考え

てたんだよ・・・』

口を濁す社長。『苦勞する・・・』ってのは、どういう事だろうか。

『まあ、そのうちわかると思うが、【Bar A waist curves】には注意するように・・・

バツの悪そうな感じを受けた僕は、それ以上聞かないことにした。

気をつける対象が、『Bar』という事は、飲み屋なのかな？

小村さんが副業でスナック等経営している事は考えられた。

でも、お酒の飲めない僕にしてみれば、関係の無い事であって・・・

飲み代が高いから、行かないように程度の忠告だと思ったのだ。

取引開始から数ヶ月が過ぎたある日。

小村さんには定期的に訪問できるくらいに取引は拡大していた。

奥さんの趣味であるクラシックは、鑑賞するだけではなく、

唄うほうの声楽が得意である事がわかったんだ。

時折仲間とともにミニコンサートを開くなんて聞いたから、

『今度は非お誘いください・・・』

セールスとしては間違っていない答えだったと今でも思っている。

小村さん宅で、ミニコンサートを開催すると連絡を受けたのは、

それから間もなくした日のことだった。

楽しみにしていたわけじゃない。

これも仕事なんだとそれ以上の感情を持つ事なくお邪魔する事にしたんだ。

午後7時から自宅蔵を改造したホールで行われるというコンサート。

僕のほかにも8名程が集まるのとの事。

VIPの人脈はVIPである事が多いのだから、僕にとっても気が抜けない。

僕が飲む事の無いワインを持参して戦闘態勢で小村邸に出陣する。

『あら、みなさんお待ちかねですよ。』

笑顔で迎えてくれた小村夫人。

その姿は、宝塚のレビューかと見間違えんばかりの艶やかな衣装を身に纏っている。

『始まる前に、ちょっとお酒でもどうぞ・・・』

飲めないと言えない状況にあるなと感じながら、

屋敷の裏手にある『蔵』を改造した音楽ホールらしき建物に案内される。

すると入り口になにやら建物の名前であろうか、金属のプレートが埋め込まれている。

【Bar A waist curves】

こっ、これかあああああ！！！！！！

突然背筋に冷ややかなものを感じる。

重厚な扉が開かれ、僕はなにやら得体の知れない空間に放り出される感覚に襲われる。

中では何が僕を待っているのだというんだろう。

もしかして、新手の宗教勧誘か？

いや、そんなものじゃなくて秘密の儀式に生贄として招かれてしまったんじゃないのか？

不安は一気に膨らんだ。

蔵の中は20畳ほどのスペースがあった。

中央にグランドピアノが置いてある。

小村夫人の伴奏に使うのであろうか・・・

品のあるピアノと、ショットバーを思わせる雰囲気あるバーカウンター。

お酒の種類も、ちょっとしたショットバーより多いんじゃないかと思われるほど

充実しているのだ。

なるほど、これが『Bar』たる由縁なのかな・・・

納得しかけるが、どうも気になる点があった。

ピアノの上から吊り下げられている巨大な物体。

・・・ミラーボール？

クラシックと落ち着いた感じの蔵からはとても調和されているとは思えなかった。

僕のほかに、先客が5名ほど居た。

蔵の中は薄暗いため、よほど近まで顔を寄せないと相手が誰なのかもわからない。

『あっ・・・』

僕はその相手に見覚えがあった。

『 銀行の田部井さん・・・ 』

『 おつ、あんしん銀行の田原さんか・・・ 』

ライバル銀行との鉢合わせは予想していなかった。

なのに、相手は落ち着き払ったように僕のことを見ている。

その目には何故か哀愁のようなものを感じる。

『 田原さんもつかまっちゃったか、お気の毒に・・・ 』

聞けば、今日集まったその他のメンバー全員が金融機関の面々なの
だと言う。

信用金庫、 信用組合、 生命、 損保・・・

地元金融機関はほとんど揃っている。

これから怪しげな宗教勧誘よりも恐ろしい事が起こると、

銀行員のアンテナが受信しているん・・・

ほどなくして、ピアノ伴奏のもと、小村夫人のコンサートが始まっ
た。

『 B a r A w a i s t c u r v e s にようこそ・・・ 』

外見の派手やかさとはちがい（失礼）その澄み切った歌声は、プロ

級だった。

伴奏は夫、小村氏みずからが演奏している。

これほどの腕前を持っているのだ。自宅を改造して披露するだけの事はある。

納得しているうちに瞬く間に2時間の時間が過ぎていった。

『さあ、これで全てのプログラムは終了です・・・』

全員が立ち上がって拍手している。

その拍手は鳴り止まない。

通常であればアンコールを求めるものなんだけれども・・・

『続きまして、よろうこそ皆さん、『バー腰曲がり』へ！』

『はっ？』

『ばーこしまがり？』

『あんしん銀行さん、これから本番なんですよ・・・』

隣にいるのは信用組合さんだろうか？

心苦しい眼差しで僕を見ている。

よく見渡すと、気の毒そうな顔をしているのは皆同じなんだ。

そして、ミラーボールが激しく回り出す！

ピアノが地下へと自動収納されると同時に、

巨大な液晶テレビとマイクが中央に登場した。

『・・・通信カラオケ？』

金融団の面々は、盛大な拍手で小村夫人を迎える。

『さあ、あんしん銀行さんも盛り上げてくれないと・・・』

促されるように拍手をもとめられる。

いつ着替えたのだろう、ますます派手な格好をして、ご登場だ。

『今夜は朝まで行くわよおお！！！！！！』

小村夫人が吼える。

『いつも5時間くらいマイクはなさないんだ・・・』

田部井さんがそつと教えてくれる。

なんでもコンサートの後は、カラオケのワンマンショーが始まるんだとか。

なるほど、金融団ならば誰一人として文句も言えない芸者集なのだ。

これほど都合の良いメンバーは他にはあるまい。

・・・蜘蛛の糸に引っかけた事に僕は気がついたのだった。

【B a r A w a i s t c u r v e s】

日本語にすると、

【バー（飲み屋）腰曲がり】

老夫婦が趣味を披露する恐怖の館・・・

第5節 【Bar Waist curves】伝（後書き）

この物語はフィクションです。

第6節 ワンダーフォーゲル伝

第6節 ワンダーフォーゲル伝

うちの銀行の大株主であり、地元でも有名な資産家である、田村五郎氏（62歳）。

毎月、高額な定期預金の満期がある為、支店長帯同にて訪問している。

満期の度に、『景品はいつもので頼むよ・・・』と言うのが口癖であり、

その景品とは【洗濯洗剤】なんだ。

だから、支店の中では『アタック』というコードネームで呼ばれている。

資産家というのは、不動産のあがりであるとか、株式の配当であるとか・・・

定職を持たずに、趣味の世界で暮らしている人が多い。

田村氏もそんな資産家の1人なんだけど、スケールが違う。

『いやあ、2週間の間に株価下がっちゃってさあ・・・30億損しちゃったよ』

涼しげに笑っているその表情からは悲壮感は微塵も無い。

大抵の金持ちは、それだけで十分破産しているんだけど・・・（汗）

そんな世界に生きる資産家の趣味の幅はとても広い。

骨董・絵画・写真・スポーツ・車・・・

あげれば切がないのだ。

その中でも、田村氏は特に写真が好きらしい。

自宅のいたる所に写真のパネルを飾っている。

支店にあるギャラリーでも展示した事がある。

『趣味を褒める』

営業マンならば基本中の基本だ。

そんなある訪問の日、僕は写真についてある事に気がついてしまった。

『田村さん、写真はずいぶん山の風景が多いですね』

訪問のたびに、応接室に飾ってある写真が変わっている。

変わっているという事は、『見てほしい』の一言に尽きる。

これを『よいしょ』『しない手は無い』

『昔はワンダーフォーゲル部だね。今でもこの地区の山岳会で山に行ってるんだ』

この話題は【当たり前】だった。

今まで銀行員から、登山の話題には触れられた事の無かった様だ。いつにもまして上機嫌な田村氏から、その日新たに大口預金を頂戴する事になった。

『いやあ。ありがとうございます。うちの支店は田村様でもっていいようなものですから』

あいかわらず支店長のゴマすりは天下一品だ。

『支店長たちは登山なんてする事ないのかい？』

人生の山には常に挑んでいるけど、登山の経験など全く無い我々。

『実は来週の日曜日、月山岳の山開きがあるんだ。』

今年から私が山岳会会長だから、どうしても盛り上げてたくてね。

どうだい？あんしん銀行のみんなで山に登って見ない。気持ち良いよー！』

『もう、是非お供いたします。支店全員で参加いたしますから！』

・・・支店長。成り行き上仕方ないけど、

僕はあなたが山頂までいけるかとても心配です。

登山家に『何故山に登るの?』と聞けば『そこに山があるから』と答えるだろう。

銀行員に『何故山に登るの?』と聞けば『VIPが登れって言うから』なのだ。

こうして、ワンダーフォーゲルの歴史に新たな1ページが刻み込まれた。

【あんしん銀行ワンダーフォーゲル部】結成。

僕と支店長、その他男性行員都合12名が月山岳山開き登山に出発した。

ちなみに女性行員は全員が参加しなかった。

『……ということで、全員で登山参加ねがいたい』

『……支店長、セクハラです』

『……』

セクハラだろうが、パワハラだろうが、

それを面と向かっていえるあなた達はすごいと思う。

【おつばねーず】は無敵である……

7月1日。

登山当日は、初夏らしい爽やかな晴天に恵まれて絶好の登山日和だ。素人登山隊の我々と、山開きという行事もあり七号目までは車で移動したのだけれども、

『ここから4時間で頂上です。途中、ゴミを拾いながら登りましょう』

・・・なるほど。人数がいたほうがいいのは、これが目的か。

『アルピニストの野 健みたいだ・・・』

行員の何人かはきつところ思ったはずだ。

山頂に近づくにつれて、下界の景色とは比べ物にならないほどの絶景が広がる。

かつて山岳信仰で栄えた月山岳は、地元では『霊峰』として知られている。

いまでも白装束を纏った集団が、修験として山頂を目指す。

何故昔の人がこの山を『聖地』として選んだのか良くわかる気がする。

山頂に近づくと、天候は一変した。

濃いガスがかかり、視界は2〜3メートルがやっと見通せる程度だ。

前を歩く人の背中を見失うと、僕以下後ろの連中全員が遭難してしまふ恐怖が沸き起こる。

どうやら山頂は、厚い雲に覆われている状態だ。

『絶対に登山道からそれないように！』

田村氏が我々を心配して声をかけてくれる。

山での田村氏はまさに『山男』であつた。

年齢を感じさせない軽やかなフットワーク。

登山道や高山植物を知り尽くした知識。

清掃作業をしながら登ることがさほど苦痛ではなかったのは田村氏のおかげであつた。

『やあ、田村さん。ずいぶん大勢でいらつしゃいましたね』

山岳会会長だけはある。清掃しながら登る我々を、

追い越していくほとんどの人が田村氏を知っているのだ。

『やあ、これはこれは。今回はあんしん銀行さんが助っ人で参加してくれて・・・』

最初は丁寧に説明していた田村氏。

けれども、あまりにも説明を繰り返しているうちに面倒になった様子。

『やあ、会長。ずいぶん大勢で・・・』

『・・・シエルパです』

・・・僕達は荷物もちの山岳民族か。

こうして、やっとの思い出山頂に到着した。

山頂は、山岳信仰の霊峰らしく、祠が祭つてある。

予定時刻の30分前につくことができたのだから、素人集団の僕達にしたら上出来だろう。

いつしかあれほど濃かったガスが薄れ始め、漆黒に近い蒼天の空が顔を出した。

『そこに山があるからってわかった気がする・・・』

そう心から思っただ。

『あれ？田村さんは』

もうすぐ山開きの開会だというのに主役である田村氏が見当たらない。

『・・・おい・・・』

すると、微かながら田村氏の声が聞こえてきた。

『・・・・・・・・助けてくれ・・・・・・・・』

『かつ会長！どこですかぁ！！！！』

なんと田村氏、突然の晴れ間にカメラを取り出し、

登山道を離れて高山植物の写真を撮りに行ったらしい。

山の天気は変わりやすいのだ。次に何時雲が晴れるかわからない。

絶好のシッターチャンスと思ったのだろうけど・・・

『大変だぁ！怪我しているぞぉ！！！！』

岩場で転倒した田村氏は足を骨折して動けなくなっていたのだ。

呆然と見送る我々を山に残して、救助の為にやって来た、

『防災ヘリ』で田村氏は1人運ばれていった。

『・・・・・・・・支店長。このゴミどうするんですか』

『・・・・・・・・銀行まで持ち帰るさ、シエルパだろ？』

あんしん銀行ワンダーフォーゲル部。

結成初日、山頂にて遭難。

第6節 ワンダーフォーゲル伝（後書き）

この物語はフィクションです。

第7節 ゴルフ伝

銀行のVIP顧客には、会社の経営者も多い。

成り上がりのワンマン経営者から、継承したボンボン二代目三代目。生え抜きの努力型社長など、経営者といってもいろんな『人種』が存在する。

それらのほとんどに共通しているのが、『ゴルフ』なんだ。

だから、『ゴルフ』は経営者にとって、『仕事』である訳で・・・結果、僕達銀行員もゴルフを『仕事』のひとつにしなくちゃいけない。

大人の趣味とするならば、一日遊んで1〜2万円。

決して高すぎる金額ではないし、パチンコや競馬をするよりよほど健全だ。

問題は、お付き合い程度の腕を習得するまで、個人的な練習が必要ということだ。

接待で行うゴルフは『経費』であるけれども、

練習で腕を磨くゴルフは、当然ながら自腹なのだ。

「今回のゴルフコンペは、田原代理も参加ね」

銀行主催のゴルフコンペはまさに『仕事』の王道。

参加を指示されれば、嫌でも参加しなくちゃいけない『赤紙』なのだ。

銀行のゴルフコンペは、誰をどの様に組み合わせるかも非常に神経を尖らせる。

例えば、同業者のライバル同士を同じ組み合わせにしないだけじゃなく、

同じ組のメンバーのバランスも重要だ。

支店長と一緒に組と、僕のような『足軽』と一緒に組の場合、

「俺を馬鹿にしているのか！」

って叫ぶ社長（馬鹿とも言つ）がいるからなのだ。

「あつ、田原代理の組は、この前の談合事件で検挙されたチームだから、

その話題は触れないでね・・・」

・・・確かに、測量業界で談合事件が起きた事は記憶に新しい（汗）間違ってもその話題には触れるわけが無いのだけれども・・・

「・・・ゴルフ参加している場合じゃないだろ？」

VIPの行動は、時に我々の常識を遥かに超える。

「ナイスショット！」

この掛け声は、「こんにちは」の挨拶と一緒に。

実際ナイスショットじゃなくても、前に飛べはそう叫ぶ。

『足軽』の重要な仕事だ。

その他に、「カメラマン」「キャディ」「宴会部長」も兼ねる。

その合間にゴルフをプレーするのだが、これが下手だとVIP達を不快にさせる。

上手すぎても嫌味となりダメなのだけでも、

上手であればスコアの調整は可能であるが、

下手であれば調整なんて出来るわけが無い。

だからそれなりの腕を持つ事は、銀行業務の知識を勉強するのと同じだ。

「田原君、なかなか上手くなってきたじゃないか」

「いやあ、社長のアドバイスのおかげです」

ゴルフが仕事のVIP達は、人に教えることを好む。

久しぶりのゴルフで、腕が戻るのでは、

必ずこういった『教え魔』の洗礼をあびるのだが、

後半慣れてくるころ『御礼』が出来れば接待としては上出来だ。

アドバイス1つでゴルフが上手になれるのなら苦労はしない。

談合事件後、暗く沈んでいると予想していたこの組だったが、

全てを忘れているのか、忘れようとしているのか・・・

とても和やかにゴルフを楽しんでいるように思えた。

こういうゴルフならば、『仕事のゴルフ』っていうのも悪くは無い。

そう思いながら、アウトスタートから中間地点にある茶屋で暫しの休憩。

「後ろの組は3人組だから早くやってくる。休憩は早目に切り上げよう」

ある社長がそう言つと、

「ああ、あの中に 建設の社長がいるだろ？」

あれ五月蠅いから、茶屋で一緒になる前に切り上げよう」

どうもとても癖のある社長が後ろの組にいるらしい。

「さて、オーナーは田原君だね。はじめてよ」

僕からのプレーとなり、ティーグラウンドで構えた瞬間。

「おい、社長お・・・」

遠くから、あの五月蠅い社長が駆け出してやってくる。

手にはお盆のような長細い器を持っているように見えるのだが、

何を言っているのか聞きとめ事は出来ない。

「あーい、社長。『だんごう』いらなしかあ！がっははははあ」

すさまじい轟音と共に現れた五月蠅い社長の手には、

先ほどの茶屋で売られていた『みたらし団子』と『ずんだ団子』が、

売られていた器ごと抱えられている。

「うるせえ！俺達に今『だんごう』って言うな！！！」

「そう言わずに、旨いよ、だんごう。ほれキャディさんもとつぞ」

・・・そのつまらない駄洒落を言いたいがために、

器ごと全て購入してきた五月蠅い社長。

おやじギャグひとつにも金に糸目はつけない・・・

VIPの行動は、我々の常識を遥かに超える。

まさにその瞬間だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6557d/>

V I P達の福音書

2010年10月25日01時19分発行